2022.10.22.　　11:25～12:55

第２回　天地のつながり

（晴天時は屋外実習あり）

天と地はなんらかのつながりがあると人類は永らく考えてきました。その哲学を見てみましょう

１．自然現象に支配される人間、弱い人間

・天気、四季の変化、月の満ち欠け、潮汐

・農耕・漁労－天気、四季の変化、潮汐に依存－自然の脅威、予知の必要性＝暦

・暦の予言性、天象への意味づけ

２．未知なるものへの畏怖心、神聖視される天と地

・巨大なものへ依拠－自然宗教

・天を神聖視、神化

・それを利用する支配者層－国生み伝説（王権神授説）、天帝（天の神）、天子、天皇（≈天帝）

・古代ギリシャ－天上界には人間の姿をした八百万の神々が（多神教）

・古代ローマの貴族－（ギリシャの）神々の末裔

・天が地上の支配者に天象を通じて意思を伝える－占星術

３．日本の占星術

・701 年　大宝律令－陰陽寮（暦博士、天文博士）

・天文博士－安部晴明（921-1005、紫式部、藤原道長の時代）

　浄瑠璃・歌舞伎－芦屋道満大内鑑

　　恋しくは　尋ねきてみよいづみなる　しのだの森のうらみくずのは

・宿曜教－インド伝来の占星術、光源氏の須磨流し

４．古代ギリシャ・ローマ時代

・BC4c～AD4 c　ストア派の影響

・西洋占星術の原典＝「テトラビブロス」（150 年頃、プトレマイオス）

・ローマのキリスト教化に伴い排斥（ストア派も）

・ストア派哲学－自然との一体観

　アリストテレス哲学の一派

　理性（ロゴス）によって感情（パトス）を制して、不動心（アパティア）に達する－禁欲主義（ストイック）

　社会とも自然とも関わりを重視－占星術の背景

問題

なぜ占星術はキリスト教（ユダヤ教、イスラム教とも）と合わないのか？

５．中世ヨーロッパ

・暗黒時代を経て、1200 年代に古代ギリシャ・ローマの占星術を再発見

・人間性を重視したプロテスタントの人たちが主に支持

　例：ティコ・ブラーエ、ケプラー（神聖ローマ帝国・数学官＝占星術師、プロテスタント）

・人体宇宙論（小宇宙論）－占星医学（イヤトロマテマティカ）

６．占星術の衰退

・科学的宇宙観の形成と共に。1700 年頃まで

７．信じたいことを信じ続ける人間

・生きる上での知恵でもある

・合理性、真偽は関係ない。宗教

・それが天文現象に基づくなら占星術

８．太陽の観察

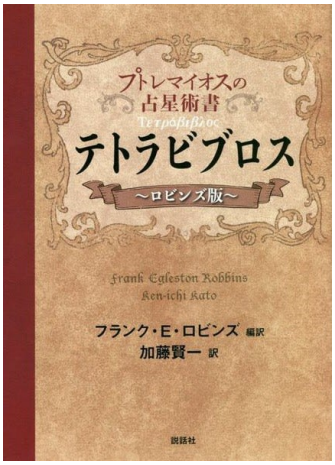
・日周運動

・天の赤道

・天の北極

・月

■補遺 「テトラビブロス」（加藤訳、2022，説話社）



第４巻第５章　結婚について

　結婚の話題が次に出てくるが、合法的な男性と妻の付き合い方を検討する方法は以下のとおりである。

　男性の場合、出生時天宮図上の月の位置を観察する必要がある。

　まず、月が東の象限にあるなら、男性を若くして結婚させるか、年下の女性と結婚させる；

しかし、西の象限にあるなら、晩婚とするか、年上の女性と結婚させる。

　そして、月が太陽光線の下にあって、土星とアスペクトをなしていれば、まったく結婚することがなかろう。

　そこで、月が単体のサインの中にあるか、または惑星のどれかに接近しているならば、月は男たちを１回、結婚させる；しかし、双体か多形のサインにあるか、または同じサインにあるいくつかの惑星に接近すれば、月は男たちを何度か、結婚させる。

■⇒　極めてギリシャ的、ローマ的　　⇔　キリスト教

・非合法的な付き合いがあった

・離婚、再婚があった